

「足るを知る」

ケアプランの価値 III

馬渡 徳子

今年、七回忌法要を終えたご遺族から、ふいに、職場に電話を頂いた。

「父からね、七回忌が終わったら、馬渡さんに渡してほしいものがある。と預かっているものがあるの。仕事が終わったら、寄ってもらえる?」

実は、ご遺族とは、その後もずっと患者会等のお付き合いを重ねている。「改まって、何だろう?」

ちょっと、わくわく、どきどきしながら、途中で、亡くなられたご本人の行きつけだった店で、「大好物だったショートケーキをお供えしよう」と、一つ買って、お宅を訪ねた。

すると、待ち構えていたのは、なんと「特上握りの寿司折り」だった。

娘さんに、「この店、覚えてる?」と

聞かれ、直ぐに思い出すことができた。その位に、印象深い出来事だった。

余命月単位と宣言されたご本人に、「もう一度行っておきたい場所、食べたいもの、逢いたい人はありますか?」と訊ねると、「それは、ケアプランに書いたでしょう。」と応えられ、「ああ、そうだった」と気付かされた。

「升席で、生の落語を聴きたい。帰りに行きつけだった寿司屋に寄って、大将と洒落た話をして、家内に土産の特上の寿司折りを買いたい。」

かくいう私も、桂 枝雀さんの落語が好きで、移動の公用車で聴いていて、訪問の時に、よく落語の話で盛り上がっていた。

直ぐに、家族と訪問看護師・ヘルパーを交えて作戦会議を開き、おじいちゃんっ子だった医学生の孫が中心となって、切符の手配や下見、移動や滞在時間の過ごし方について、綿密な計画を立てた。

当日は、冬の凜とした清々しい晴天だった。孫と訪問看護師とヘルパーと運転手としての幼馴染の友人と私が付き添わせていただいた。

皆で、泣いたり笑ったりの一時間だった。帰りに、行きつけだった寿司屋に寄ると、既に孫が注文してあった寿司折りを受け取り、帰宅した。

特上とメモしてある寿司折りと、カッパ巻きと書いてある寿司折りがあった。正直、ちょっと、わくわくした。けれど、職務上、たとえ今日は介護保険提供サービスではなく、ボランティアだとしても、もしも特上を勧められたらどんなふうにも、対応しよう……。

自宅に着くと、ご本人がこのように言われた。「今日は、本当にありがとう。将来の跡継ぎの孫が企画してくれて、幸せな半日だった。これは、御礼です。今日だけは、断らずに召し上がってください。」

そして、カッパ巻きを、孫と訪問看護師とヘルパーと私に。特上握りを、幼馴染の友人と妻に。ちょっと残念そうな顔をしてしまった私に、「あはは。あなたたち 40-50 の若者に、特上握りは早いです。特上握りは、定年になってから食すもの。それまでは、『足るを知りなさい』と、まるで、いたずらっ子のように大声で笑ったその笑顔が、今でも忘れられません。

医師でもあったご本人には、作成したケアプラン原案を何度も赤ペンで修正され、「わしは医者なんだから、素人みたいな書き方をせずに、もっとそのまま医学用語を使いなさい。」「いいねえ。わしらしいぞ。これならば、葬式で披露できる。」と、「サービス計画書」は、誰を主語にして書くべきなのかを、昏々と教えて下さった。

時々、私のことを「婦長!(不調)」と呼ばれるので、「いいえ、絶好調です!」と応えると、「いいねえ。その調子。難しいときこそ、平気に、愉快地、いかんとな。」と、諭された。

ご本人は、おそらく七回忌を過ぎた頃に、私が定年を迎える還暦あたりだと予測しておられたのかもしれない。

でも、天国の先生、ちょっと二年早いですけれど。笑。

ショートケーキをお供えして、特上握り折りを抱き、娘さんの前で、私は、わあっと泣いてしまった。

私は、奢らず、謙虚に、足るを知り、生きてこれたかな……
いやいや……。

天国の先生、

これからも、ずっとずっと課題です。